

Wilhelm Geerlings : *Christus Exemplum. Studien zur Christologie und Christusverkündigung Augustins*

Tübinger theologische Studien, Bd. 13

Mainz, Matthias-Grünwald-Verlag, 1978, x+278 S.

森 泰 男

現代神学において、キリスト論は神学の中心テーマである。というのは、多くの神学者は、啓示をとおして初めて神を知ることができるからである。たとえば、カール・バルトは「使徒信条」の第2項（イエス・キリスト）から第1項（父なる神）と第3項（聖霊）を理解しようとしているのである。

それに対して、教父たちはどうであろうか。彼らはまず哲学的に神の存在を論証し、次に信仰によって神の三一性を理解し、その後にはじめて第2のペルソナの受肉を論じるのであろうか。

アウグスティヌスの三一論はつとに有名である。また、彼の恩恵論も——正確に理解されているか否かはともかくとして——よく知られている。しかし、アウグスティヌスのキリスト論というと、当惑する人もあるであろう。確かに、彼は『三位一体論』に相当するようなまとまったキリスト論を書いてはいない。しかし、キリスト論はアウグスティヌスの中心問題ではなかろうか。『告白』や『神国論』におけるキリストの意義の強調はそのことをよく示しているのではなかろうか。したがって、アウグスティヌスのキリスト論を明らかにすることによって、彼の恩恵論もはじめて十全に理解されるのではなかろうか。評者はそのように考えているのである。

それにもかかわらず、アウグスティヌスのキリスト論についての研究は少ない。アンドレーゼンの *Bibliographia Augustiniana* を見ても、そのことは明らかである。

その中で、オットー・シェールのことを忘れてはならない。彼は1901年に、イエス・キリストの人格と働きに関する大きな本を著わした。これはアウグスティヌスのキリスト論を本格的に取り扱ったモノグラフィーで、今もなお基礎的な文献である。しかし、シェール自身の立場は今日批判されざるをえないであろう (Geerlings, S. 5-7)。

しかし、非常に意欲的なキリスト論の研究が1978年に現れた。著者のゲーアリングスはチュービンゲン大学のアウグスティヌス学者で、『アウグスティヌス事典』 (*Augustinus-Lexikon*) の編集委員の一人でもある。

ゲーアリングスはまず序論において、今世紀の研究史を概観する。アウグスティヌス研究のテーマは大雑把に言えば① 恩恵論 ② 認識論 ③ 教会論 の三つであったが、いずれの問題も、それを深く掘り下げるならば、キリスト論に至りつく筈である。数少ない研究の中で、古代教会のキリスト論に対する新しい関心をひき起こしたのは Jungmann の *Stellung Christi im liturgischen Gebet* (1925) である。そこでは明らかに per Christum ad Patrem という方向が認められている。確かにアウグスティヌスの祈りや説教においては、キリストの意義が強調されている。そこで多くの学者はアウグスティヌスの神学をキリスト中心的と判断した。しかし、この判断は正しいであろうか――。

広くひろまったこの判断に対する疑いからゲーアリングスは出発する。確かに、ヒッポの司教であり魂の牧者 (Seelsorger) であるアウグスティヌスを無視して、哲学者アウグスティヌスばかりを語ることは許されないであろう。事実、アウグスティヌスは祈りや説教において親しく人々に語りかけているのである。従来の教義史は民衆の信心 (敬虔) を無視ないし軽視して、神学的・哲学的な理論にばかり注目してきた。しかし、アウグスティヌスのキリスト理解を正確に知るためには、彼の信心と倫理に注目し、それらを掘り下げて、それらの教義的な基礎を明らかにしなければならない。我々は教義的な理論と司牧的なキリスト教宣教の両方をしっかりと見なければならぬ、とゲーアリングスは考える (S. 7-9)。

以上からも明らかなように、ゲーアリングスの関心は信心史にある。アウグスティヌスの思想は、祈りや説教などをみると、キリスト中心的と思われる。しかし、著者によれば、それらの文献をより詳しくみてみると、アウグスティヌスはそこに

においても神中心的なのである。アウグスティヌスは初期から晩年に至るまで一貫して唯一の神、三一の神から出発する。神の全能こそアウグスティヌス神学の最も深い思想なのである。

そこで、著者は第一章において、アウグスティヌスの神論と三一論を考察する。初代のキリスト者は大胆にキリスト告白を表明した。しかし、やがてキリストと神との関係が問題になり、ニカイア会議やコンスタンティノポリス会議において、三一の神がドグマとして定められた。更に、神学的議論は経綸的三一論 (ökonomische Trinitätslehre) から内在的三一論 (immanente Trinitätslehre) へと発展した。今や、三一性は外への働きにおいてのみならず、神自身の内部において認められるようになった。

アウグスティヌスはニカイア・コンスタンティノポリスからエフェソス・カルケドンへと、すなわち、三一論からキリスト論へと移る転換点に立っている。著者によれば、アウグスティヌスの著作は三一論に向けられており、キリストに関する彼の言表もその三一論から理解されねばならない (S. 24)。

そこで、ゲーアリングスはまず最初にアウグスティヌスの神論を取り上げる (a) 絶対的存在としての神 b) 一なる神 c) 無時間的・不変的な神、等)。次に、著者は2節において三一論を考察する (1. inseparabilis operatio trinitatis ad extra. 2. 旧約聖書の神頭現の釈義 3. アウグスティヌス的三一論の救済論的関連)。ゲーアリングスによれば、第1章は次のようにまとめられる。(1) アウグスティヌスの神論の中心は神の唯一性という思想である。アウグスティヌスの神論において聖書的な思想財とプラトンの思想財とが合流しているが、アウグスティヌスの唯一性概念は汎神論の危険を免れている。(2) (省略) (3) unus deus の思想と不可分離に結びついているのは、神は無時間的であり不変的であるという主張である。(4) 神の唯一性の強調は神論に限られず、三一論に関わる。アウグスティヌスの問題は、三一の神の一性を説明することであった。(5) 三性よりも一性を重視することから inseparabilis operatio trinitatis ad extra のテーゼが出て来る。(6) 以下省略。

次に、ゲーアリングスは第2章において、アウグスティヌスのキリスト論を取り上げる。上述したように、アウグスティヌスはキリスト論に関して本を書いてはいない。しかし、Volusianus にあてた書簡 (137) において、彼は神の受肉 (托身) の

問題をかなり詳しく論じている。そして、私見によれば、受肉の問題こそアウグスティヌスのキリスト論の中心なのである。ゲーアリングスのまとめによれば、受肉の問題を考えるアウグスティヌスの出発点は神の絶対に自由な意志という考えである。受肉はふさわしいあり方ではあっても、強いられたものではない。神は他の仕方でも人間を救うことができたであろう。アウグスティヌスが好んで引用するテキストはピリピ人への手紙2章6—8節である。(3) アウグスティヌスにおいては、創造と救済とは対応している。最も重要な議論は「アダム＝キリスト」論である。創造は *formatio* であり、救済は *reformatio* である。(4) 受肉の目的は *reparatio* と *sanatio* である。したがって、中心的なキリスト称号は *Christus medicus* である。(5) アウグスティヌスは人間における心身の統一を強調する。この人間論的両性論（心身論）の上に、彼はキリスト論的両性論（神－人論）をのせている。ここから、カルケドン信条への道が開かれてくるのである。(6) キリスト論的統一を説明するために、アウグスティヌスは *anima mediatrix* の理論にたち帰る。それは不変的な神性を可変的な人性から区別するためである。*anima mediatrix* はロゴスと身体間の「緩衝地帯」と考えられている。(7) (省略) (8) イエス・キリストの罪のない人性は実例 (*Beispiel*) であり、罪人に対する警告の徴である。

更に第3章において、ゲーアリングスはアウグスティヌスのキリスト論の特徴と彼がみなす「キリスト模範」(*Christus exemplum*) 論を取り上げる。彼自身のまとめによると、(1) キリスト教以前のラテン文学においては、*exemplum* 概念は修辞学的伝統において用いられ、教育的論述の中に見られる。(2)～(4) (省略) (5) アウグスティヌスは *exemplum* 概念の全体をよく知っていた。彼は説教において実例（たとえ）をしばしば用いている。(6) しかし、アウグスティヌスには教育的な *exemplum* 論がない。*exemplum* は全く神学的な脈絡において用いられている。(7) 大切なのは *exemplum fidei* である。(8)～(9) (省略) (10) 人間は神の形に創られており、神に似たものとならねばならない。イエス・キリストは *exemplum imaginis* である。(以下省略)

いずれにせよ、*Christus exemplum* は単なる道徳的な模範ではない。*exemplum* と *adjutorium Dei* とは矛盾しないし、*exemplum* と *sacramentum* も両立しうるのである。

以上で明らかのように、本書は今まで余りかえりみられなかったアウグスティヌスのキリスト論を、*exemplum* 概念を手がかりにして詳しく考察したものである。アウグスティヌス研究の伸展に大きく寄与する業績といえよう。

G. R. Evans : *Augustine on Evil*

Cambridge U. P., 1982, xiv+198 p.

泉 治 典

著者エヴァンズは現在ケンブリッジのシドニー・サセックス・カレッジの中世教会史教授である。アンセルムスに関する最近の二著については、本誌23号で山崎裕子氏が書評されたとおりである。高名な R. W. サザーン教授を師とし、この師と同じく歴史と思想の両方に関心を持ち、11~12世紀を中心とするいわば思想史的研究を行なっている。毎年数点の論文を発表して、その一部は *Theologische Zeitschrift* (パーゼル) や *Studia Theologica* (スカンディナヴィア圏を代表するもの) にも掲載されている。最近のアンセルムス学会では二度幹事として活躍された。アウグスティヌスに関する著書はこれが初めてである。

本書は序文のあと7章に分かれる。Ⅰ. 悪の経験。Ⅱ. 問題の提示。Ⅲ. 精神における悪。Ⅳ. 宇宙における悪。Ⅴ. 悪の解決法。Ⅵ. 善の生成と存在。Ⅶ. 神の命令。最後にエピローグとして、アウグスティヌスの把握の受容と変化をルターに至るまで追っている。

本書は個々の用語の意味や概念構成を詳論したものではなく、また現代の哲学的関心から考察したものでもなく、むしろアウグスティヌスの初期・中期・後期をとおして問題の流れと連関を明らかにしたものである。アウグスティヌスの場合、悪の問題の第一の動機は真理認識に至るための精神の浄化という、古代末期哲学一般に見られるそれであったと言えるが、これがアカデミア派、マニ教、ペラギウス派